
千なる彼方が六の鬼

上木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千なる彼方が六の鬼

【Nコード】

N4184Y

【作者名】

上木

【あらすじ】

地形や積み重ねた歴史が様々な怪異を呼ぶ街——江甲。驟雨の最中、休憩のために入った使われていないバス停で、刑部不比等は奇妙な少女と出会った。

その後も、探しても狙ってもいないというのに偶然の遭遇を繰り返す二人は、いつの間にか互いに、特別な何かを見出していた。

狂風が舞い、狂犬が嗤う。江甲に引き込まれる怪異を狩るために二人は手を組み、落とし屋として仕事を共にする決意を固めた。

雷鳴と共に

驟雨に見舞われた。

景色は熱気と雨粒によって薄白み、舗装されていない畦道が跳梁しているような錯覚を抱く。土が弾けているのだ。

スニーカー全体とチノパンの裾が泥だらけだった。ついさっきまで晴れ渡っていたから、傘も持つて来ていない。降り掛かってくる雫を一身に受けながら歩き続けた。

視界に広がるのは田園と雑木林。アスファルトもコンクリートも見受けられないこの景色は、些か時代の感覚を狂わせた。

夏の雨だな、と不比等は思った。全身は雨に濡れているが、寒くはないのだ。むしろ涼しいくらいで、汗を全て洗い流していった。

自分以外に人影など見当たるはずもない。曇天の下で、不比等は孤立している。

雨音が鼓膜を打ち続ける。それ意外には何も聞えず、視界も朧けだった。

ここまで雨に降られてしまっただう足掻いたところで何も変わりはしない。不比等^{ふひと}は、投げやりな気分になっていた。傘を持っていない事を悔やむ気も失せている。

畦道を抜けて、少し広い道に出る。景色は相変わらずだ。車が通る事もあるらしく砂利道は真中が盛り上がり、削られている部分には水が溜まっていた。泥水を見るなどいつ以来だろうか、としばし考える。

霧がかかったような景色に不比等は視界を巡らせながら、右手に見える雑木林に足を向けた。確かあちらには古いバス停があったはずだ。

何かに化かされてでもしたらこういう気分なのだろうか。雑木林と田園以外には何もなく、夕立のおかげで視界は悪い。自分の住む世界とは別な場所に迷い込んだ気さえしてくる。

華々しさはない、むしろ寂びている。しかし、不比等にはその景色が美しいと思えた。雨は激しく音を立てているというのに、不比等は大きな静謐に包まれているのだ。

不意に、異物が飛び込んで来た。田園も同じではあるのだが、人工物だ。木片を組み合わせて作られてた小屋のようなものが、雑木林を背にして黒々とした影となっている。

目的のバス停だと気付くのに、些かの時間を要した。日中、稀に通過するだけの道だ。少し環境が変わると、同じものがまるで違うものに見えたりする。

「今更、何も変わらないけどな」

一人呟きながら、不比等は小屋を覗き込む。

小屋は壁の一面だけを全て取り払い、街道側に口を広げていた。中には小屋自体と合一した木製のベンチがあり、座る事は出来る。典型的な田舎のバス停だった。

このバス停はもう機能してはいないはずだ、と不比等は思った。バス停が背を向けている雑木林の中に、古い山荘があったのである。そこを訪れる人のために作られたような停車場であった。山荘の閉館に伴い、バス停も放棄されたのだ。

屋根が雨を遮る。雷鳴をも伴い始めたそれは、しばらく止みそうにもなかった。

「まあ、たまにはこういうのもいいか」

ただ過ぎ去る驟雨をじつくり、他の物を一切断ち切って眺める機会などあまりない。花鳥風月を友とした覚えはないが、現代人がこういうものに憧憬を抱く理由は何となく理解できる。自然は非日常的な気配を含有しており、無意識にでも特別な何かを感じさせるのだ。

不比等はベンチに腰を下ろし、朧げな視界を巡らせた。

散歩のつもりで歩いていたら、ついつい遠くまで来てしまった。

不比等の衣服が吸い込んだ水滴が、ベンチの木を黒く染める。

子供の頃は、こうしてよく遊び回ったものだ。不比等にとっては

この田園風景が幼少の頃の記憶であった。

駄菓子屋で食料を買い込み、自転車を走らせてここまで来る。そしてしばらくは、自然の中を駆け回るのだ。その後に食べる駄菓子がたまらなく美味しくて、たかだか百円の買い物で驚くほどに満たされていた。

あの頃から自分が遠退いたのか、あの頃が遠退いていったのか。束の間考えてしまう。

不比等はもう、二十二歳になっていた。

「先客がいるなんて。奇縁ですね、お兄さん」

突然の声に、不比等は弾けるように眼を向けた。

「びつくりさせました？ けどこっちもびつくりです、こんな夕立の中、使われてないバス停でくつろいでるお兄さんを見かけたんですから。最初は人じゃないのかと思いました」

そこには、小柄な少女がいた。座っている不比等と目線の位置が同じだった。

紺色のブリーツスカートに真っ白なシャツという清潔感のある格好が、どこことなく育ちの良さを垣間見せる。

「私も雨宿りなんです」

言いながら、少女は不比等から少し離れたところに腰を降ろした。不比等は適当な生返事をしただけだ。

本当に、妙なところで人と会う。周囲に民家は愚か、建築物の類いはほとんどない。あるとすれば、背後の雑木林の中にそびえ立つ古びた山荘だけなのだ。本来ならばこのような場所は田に関わりがある人間でもない限り訪れる事はほとんどない。

驟雨の終わりを待つ、刹那の奇縁であった。不比等を気にする風もなく、少女はベンチに深く腰掛けて雨を眺め始める。

「こんなところで何してたんだ？」

「それ、お兄さんが言える事じゃないです」

言いながら少女は微笑みを浮かべる。本当に、子供のような笑みだった。言葉や物腰がしつかりしているが容姿が幼いため、年齢が

いまいち読めない。

「俺は散歩の途中でこの通り、全身ずぶ濡れでな。今は休憩ってところだ」

ふと、不比等は違和感を抱いた。それがどこから発するものなのかは分からない。ただ漠然と、この少女は何かがおかしいと訴えかけてくる何かがある。

しかし、あまり不躰な視線を送るのも躊躇われる状況であった。人気のないこんな場所ならば、何が起きても警察を呼ぶ者はいないのだ。おかしいな誤解は抱かれたくない。

「私も、お兄さんと似たようなものですかね。ちょっと気になる事があつて歩いてたらこの通りで」

「災難だな」

「そうでもないです、雨は嫌いじゃないです」

少女は屋根から少し手を出し、雨に白い肌を晒す。そこで、不比等は自分が抱いた違和感の正体に気付いた。

この少女は、傘も持たずに雨の中を歩いて来て、僅かな水滴も浴びていないのだ。

不比等が座っている場所は水を吸い込んだ木が変色しているが、少女の周囲は変わらずに木目が浮かび上がっているだけである。

肌の白さも、それに相反する漆黒のような短い髪も、どこか人間離れしているように感じられた。

もしかすると、人ではないのかもしれない。ふと、そんな気持ちがある。

「幽霊を見たような顔、してます。私も、同じ気持ちですけど」

「俺が幽霊に見えるか？」

「ええ、とつても」

どこが、と少女は言わなかった。笑って見せただけである。ただその笑顔に害意はなかった。そして同時に、本物の笑顔でもないと思えた。

「私が本当は幽霊だつて言ったら、信じます？」

「思いつく限りの質問を浴びせるかな。何しろ見た事がない」

いたずらっぽい笑みを浮かべながら問いかけてくる少女は、幼い容姿に不似合いな妖艶さを孕んでいる。案外、思っているよりも年長なのかもしれない。

「なるほど、じゃあ私は人間という事においておいたほうが良さそうですね」

少女は首もとにあるネックレスを手で弄びながら喋っていた。古びた鍵という、少し珍しいトップだ。

不比等は、胸ポケットに手をつ込んだ。煙草が入っているのだ。雨を浴びてしまったが、まだ大丈夫だろうか。

湿気っているかもしれないが、構わずに火を点す。案外、煙草の箱は雨に強いと不比等は思っていた。

煙がたゆたう。白煙はゆらゆらと実体を掴ませず、不比等の目の前から消えていく。雨音の静寂の中へと紛れているのだ。

「幽霊、信じてますか、お兄さん？」

「信じてる」

不比等の迷いない言葉に、少女は些か驚いたような表情を見せた。しかしすぐに微笑へと戻る。

「なぜ？」

少しだけ語呂を漁った。思っている事を形にするのはなかなか難しい。

そうだな、と不比等は前置きをしてから少女の眼を見た。

「この江甲だけを見ても、牛鬼の慣れ果てと言われる怪物岩、無限に広がる地下世界、なんて民間伝承がある。心霊スポットなんて数え上げれば終わりが見えないだろうな。江甲みたいな半端な都市でさえそんな有様だ。これはもう、いないはずがない。世界を見渡せばそんな話はごろごろ転がってる。いないと頭から否定するには、あまりに多すぎるほどにな」

正直な気持ちだった。いないと頭ごなしに否定するには、あまりに数が多すぎないか。それは不比等が抱く純粋な疑問であり、答え

でもあった。火のない所に煙は立たない、という理論だ。

初対面の人間と妙な話題になったものだ、と不比等は思った。それも、このような奇縁が成せる業なのかもしれない。

頭のおかしい奴と思われるでも仕方がないような事を不比等は言っていたが、少女はそうは受け取らなかったようだ。頷きながら、ただ訊いている。

「けど実際に見た事はない？」

「ないな。大抵は人から聞いた話で、それはF O Fだ」

ふふ、と少女が笑う。そして、ぴつと不比等を指差した。

「お兄さん、やっぱり幽霊ですね」

「そうか？」

「道端で出会った女子高生に、自分の存在を認めてもらおうとしている可愛い幽霊です」

幽霊云々よりも、この少女が高校生であるという事の方に不比等は気持ちに向いた。確かに妙な色気は持っているが、それでもせいぜい中学生、運が悪ければ小学生呼ばわりされてもおかしくはない若く見えるというより、幼く見える。それは垢抜けなさから来ているものではなく、生来の容姿なのだ。

会話が途切れた。しかしその沈黙は不比等にとっては不思議と心地よいもので、無理に破ろうとも思えない。少女もそれは同じように、足を揺らしながら上機嫌そうに雨を見ていた。

雷鳴が奔る。曇天を切り裂く刃のようだが、雨が止む気配はない。残り三十分、と不比等は見切りをつけた。それでも雨が終わらなければ、濡れ鼠で帰る。

「……あつ」

少女が、何かを思い出したように声を上げた。

「用事が出来たみたいです。お兄さん、また縁があればどこか会いましょう。あと、ここから少し離れたほうがいいかもしれません」

「離れる？」

「それじゃあ、またっ」

少女が小屋から駆け出していく。雨を気にしている風もない。不比等はそれを止めるでもなく、ただ見送った。

変な女だったな、などと不比等は反芻しながら煙を吐き出す。

一瞬、夕立時に相応しくない爽やかな風が、頬を撫でた気がした。

雷鳴と共に（後書き）

初めましての方は初めまして、そうでない方はいつもありがとうございます。

趣味で創作活動をしている上木です。

この『千なる彼方は六の鬼』は初めての現代ファンタジーとなります。尚、一度連載を始めたのですが致命的なミスに気づき一度削除しております。再連載という形ですね。

今回は不定期連載となりまして、全体としては三部構成のつもりです。

最後までお付き合いくださるととても嬉しいです。

次に後書きを書くのがいつかは分かりませんが、何もなければ一部終了時点となるだろうと思います。

それではまた、よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4184y/>

千なる彼方が六の鬼

2011年11月16日03時27分発行